

天魔 空中

真保裕

Shimpo Yuichi

上





講談社文庫

天魔ゆく空(上)

真保裕一

講談社

著者 | 真保裕一 1961年東京都生まれ。アニメーションディレクターを経て、'91年『連鎖』で第37回江戸川乱歩賞を受賞し作家デビュー。'96年に『ホワイต์アウト』で吉川英治文学新人賞を受賞。'97年には『奪取』で日本推理作家協会賞と山本周五郎賞をダブル受賞、2006年『灰色の北壁』で新田次郎文学賞を受賞。他の著書に、『取引』『震源』『防壁』『朽ちた樹々の枝の下』『黄金の島』『ダイスをころがせ!』『栄光なき凱旋』『最愛』『追伸』『覇王の番人』『アマルフィ』『デパートへ行こう!』『ブルー・ゴールド』『天使の報酬』『アンダルシア』『猫背の虎動乱始末』『ローカル線で行こう!』『正義をふりかざす君へ』など多数。

てん ま そら
天魔ゆく空(上)

しん ほ ゆう い ち
真保裕一

© Yuichi Shimpō 2014

2014年4月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——大日本印刷株式会社

製本——大日本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277816-9

目次

序

翁 おきな

7

破ノ一段

童子 どうじ

47

破ノ二段

般若 はんにや

199



講談社文庫

天魔ゆく空(上)

真保裕一

講談社

目次

序

翁 おきな

7

破ノ一段

童子 どうじ

47

破ノ二段

般若 はんにや

199

登場人物

細川政元 ほそかわまさもと 聡明丸 そうめいまる 通称・九郎。官職・右京

大夫 だいぶ。

安喜 あき 政元の姉。のちの洞勝 とうしょう（洞松）。

細川勝元 かつもと 政元と安喜の父。

波瑠 はる 勝元の正室。山名宗全 やまな そうぜんの養女。春林 しゅんりん

寺 じ。

細川勝之 かつゆき 勝元の養子。

細川政国 まさくに 細川典厩家 てんきゆうの当主。官職・右馬

頭 かみ。

細川成之 しげゆき 阿波細川家の当主。官職・讃岐

守 かみ。

一宮賢長 いちのみみやたなが 細川家内衆。

安富元家 やすふもと 通称・新兵衛。政元の重臣。

香西元長 こうさいもとなが 通称・又六。政元の重臣。

日野富子 ひの とみこ 足利義政の正室。のちの妙善院 みょうぜんいん。

足利義政 あしかが よしまさ 八代将軍。

足利義尚 よしひさ 義政と富子の子。九代将軍。のち

の義熙 よしひろ。

足利義視 よしみ 義政の弟。

足利義材 よしき 義視の子。十代将軍。のちの義

尹 ただ。

清晃 せいこう 義政の兄政知 まさともの子。のちの義澄 よしずみ。十一

代将軍。

畠山政長 はたげやまさなが 官職・左衛門督 さへもんのかみ。

赤松政則 あかまつまさのり 官職・左京大夫 さきやうのだいぶ。

天魔ゆく空（上）

序
翁 おきな文明四年 春 ぶんめい細川勝元 ほそかわかつもと

足元めがけて黒い影が迫った。

武家の習いで、息を詰めた。が、殺伐の気はない。それもそのはず。兵乱はひとま
らくちゅうず洛中から消えて久しい。この庭に驟雨となつて矢が飛来した日から、早五年がすぎ
 た。

鳥であつた。

見上げた蒼天を、すべやかに黒い影が横切つてゆく。あれは鳶か、鵂鳥か……。

あの者らのように天空を翔られたなら、結ばれる心がどれほど晴れるであらうか。

「殿。そろそろお支度を、と」

新殿には白木の香しさがまだ漂っていた。その渡殿へ踏み出しながらも、漫然と空

を見上げて動こうとしない主君を前に、近習きんじゆが氣忙しげにひざまずいた。

遙はるかな雲居くもいを望んだまま、細川勝元は直垂ひたたれの袂たもとを揺らした。控える近習の鼻先に風を送った。

「そう急せくな。公方くぼう様がお出いでにならねば、どのみち興行は始まらん」

「支度とこのは万端、調とこのつておりまする」

つい半刻前まで、舞台を設けた奥庭が、京雀きやうすずめの囀さえずりよりも騒がしかった。壁代かべしろの幕を張り渡し、棧敷さじきを掃き清め、樂屋に装束しやうぞくと鳴り物を運び入れる。多くの雑人ぞうにんが走り、細川家の女房衆も手を貸し、辺りの温氣うんきがにわかに高まるほどであつた。

が、すでに咳しわぶきひとつ聞こえない。すべての者が息を詰め、寶まらひとがお出ましになるのを、今か今かと待ち受けていた。

「公方様も、さぞやお待ちでござりましょう」

近習が、うながしの目遣いを向けた。殿の鳥好きにも困つたものだ。口にせずとも、胸中が眼差まなざししに表れていた。

「のう。おぬしも猿樂興行ざるがくを待ちきれぬのか。それとも、面倒を早く終わらせたいのか。正直に申してみい」

「どちらも実げにござりまする」

近習は取り繕うことなく言つた。

「図太いやつよ……。が、それでこそ細川家の重臣であつた。」

勝元は呵々と笑い返すと、再び近習の顔を撫でるように袂を振り、渡殿へ歩んだ。

御台所——日野富子との反りが合わず、朝な夕な息苦しくてならない。そう嘆く公

方を慮つて、新たな御殿を屋敷の横に作事させた。年の暮れになつて一度は室町殿

に戻つたものの、青葉が芽吹くとともに、またも武家御所を抜け出してきた。

西幕府はいまだ旗幟を降ろそうとせず、洛外ではなおも大乱の余波がつづく。戦を

収めるべき將軍が、妻との不和のほうに気を取られている。

京の町を焼き尽くした大乱の前より、足利義政は近侍の者に常々語らつていた。早

く將軍職から降り、隠遁の身になりたい、と。

偉大なる祖父義満を模して、院政を気取る心積もりがあつたのだろう。が、ただ妻

から逃げる姿を見せられては、その志のほどは疑わしく思えた。武家を束ねる將軍

の、この覇氣のなさが未曾有の大乱を引き起こした。そう勝元は信じている。

が、信義とは無縁の男が將軍の座にあるからこそ、武家がこぞつて管領たる勝元を

頼り、細川家の安泰があつた。御輿が軽すぎるために、細川という重石が求められて

いた。

この庭に建てた新殿も、勝元らしき諂へつらいさま、と西幕府の輩やからどもは腐くさして憚はばらないと聞く。

言いたい者には、言わせておけばいい。所詮しよせん、この大乱に大義などなかった。心許こころもとない將軍につけ入り、私欲を得んとする者どもが、餓鬼のごとき本性を見せた末の戦であつた。遙か平安の昔から、京には浅ましき魑魅魍魎ちみもうりようと怨霊おんりようが跋扈ばつこしている。

渡殿を進んでいくと、徳利とくりがふたつ、長廊下の端に転がつていた。

あきれたことに、義政は早くも酒を運ばせていたらしい。

勝元は胸の荒すさみを隠して回廊にひざまずいた。將軍のくすむ目を見ずにすむよう、障子しょうじの陰から声をかけた。

「右京大夫勝元にござりまする」

「おうおう。待つておつたぞ。ようやくであるか……」

武門の長とも思えぬ魂の腑ふ抜けきつた声が、さわと漂つてくる。

進もうとした足が動かなかつた。障子の奥からは、女の息遣いまでが聞こえた。妻まづりごとと政から逃げておきながら、昼日中に女性によしやうを侍はべらせている。これが我らの担かつぐ大將なのであつた。

情けなくて沈みそうになる声を絞しほり、形ばかりに頭こうべを垂たれた。

「棧敷の支度、調いましてござりまする」

「ふむ。今ゆこう。あとしばし待て」

「一同、心よりお待ち申し上げております」

勝元は短く答え、早々に渡殿を引き返した。後ろにつづく近習らもうつむいていた。

六代將軍足利義教は、評定衆の意を諮りもせず、独断で政道を思うがままに貫いた。よしのり ひようじよう意に沿わぬ家臣を遠離け、とおざ時としてその首を刎ねた。は逆らう者は、たとえ鎌倉府の長であろうと、討伐の憂き目を見た。う聖地と謳われた比叡山にも攻め寄せ、火を放った。うた多くの守護大名は震え上がり、万人恐怖と囁かれた。ささや

そのあげくに義教は、侍所の頭人であつた赤松家の当主満祐によつて、その屋敷に誘い出されて首を斬られた。さむらいどころ とうにん あかまつ みつすけ次に討伐されるのは我と信じる満祐が、血迷つた末に刀を抜いたのであつた。

跡目を継いだ息子の七代將軍義勝は、わずか十歳にて病没。よしかつ

義勝の弟であつた義政は、十四歳になるのを待ってから、八代將軍の座に据えられた。た。

父と兄が相次いで没したため、幼い義政はただ生きることのみが果たすべき務めと

なり、傷つきやすい玉のように手厚く育てられた。自然、嗜みは武芸たしなよりも文芸に傾き、公家の若君さながらの養育であつたと聞く。そのため、父義教の独断とは黒白こくびやくの差で、大人の顔色のみを見ればよしと考え、今も馴染みの評定衆の意をそのまま受け入れるという節操のなさであつた。

「ぜひとも聞かせてくれぬか」

ふいに、頭上より若やかな声が降つてきた。

足を止めて振り仰ぐと、渡殿の板屋根から小さな人の影が落ちてきた。たちまち周りの近習が刀の柄つかに手をかけ、身構えた。

人が近づけばわかるようにと敷き詰めた小砂利こじやりが、かすかに鳴つた。

浅黄色あさぎの小影がすつくと庭先に立つた。水干すいかんの裾すそを尻しりまでたくし上げ、両の足があらわになつてゐる。袂も邪魔だつたらしく肘ひじに巻きつけ、髪はいつものざんばら。今日もまた傳めつのもとから逃げてきたようである。

さほど音も立てずに屋根から降り立つとは、まさに小天狗こてんぐそのもの。勝元は笑いと苦みが胸に込み上げた。

「聡明丸そうめいまる。新殿には近づくな、と申しつけたであらう」

「わかつておるわい。されども、父上のほかは、どうにも頼りにならん。ここへ来る

しかなかったのじゃ」

まだ七つでありながら、聡明丸は大人びた憂いうれを眉に浮かべ、勝元を真つ直ぐに見据えてきた。

「政国まさくにがまた悲しむであろうな。よいか、おぬしの傳は、細川きつての切れ者ぞ」

細川典厩てんきゆう家の当主である政国に、聡明丸の養育はすべて任せてあつた。典厩家の屋敷は、通りを隔てた向かいにある。小天狗の身ごなしで、警固けいこの者の目をかいくぐつて来ること度々たびたびであつた。

聡明丸がまたも大人びた笑みを見せた。

「政国か……。あやつは妙心寺みょうしんじの大鐘おおかねよ。堅物かたぶつなうえに、いくら押してもまったく動

かん」

横で近習らが口元を引きしめ、笑いを堪こらえていた。まさに言い得て妙であつた。

が、勝元までが笑うわけにはいかない。

「口を慎つつしまんか」

勝元の一喝を聞き流して、聡明丸が渡殿にひよいと飛び乗つてきた。

「のう、父上。なぜ猿樂ばかりを、こうも好むのか」

公方の好みを問うたのではない。この細川家でも、丹波たんばの流れを引く猿樂座を鼯ひいき肩